

雑煮椀を作ろうからのモノづくり — オケクラフトの30年 —

オケクラフトセンター森林工芸館 専門員(前館長) 北山 雅俊
URL <http://www.town.oketo.hokkaido.jp/kougeihp/index.htm>



■生産教育と工芸思考をクロス

1983年(昭和58年)に生まれたオケクラフトは、昨年30周年の節目を過ぎ、31年目の新たな道を歩み始めました。オケクラフトの誕生は、既にいろいろなメディア等で伝えられていますので、ここでは簡単に紹介します。



オケクラフトは、「生産教育」という概念と故秋岡芳夫さんが提唱した「工芸的な生活文化の創造」という考え方方がクロスして誕生しました。当時は、まだまだ材料が豊富にあった時代。建築製材に不向きなエゾマツのアテ材は、薪かチップ材にするぐらいの利用価値しかなく、厄介者でした。木工口クロ機を使い、エゾマツのアテ材で正月の雑煮椀を作ろうという講座がスタートする一方で、置

戸に代々伝えられてきた割木技法の曲げ輪を新たなデザインで作り直すプロジェクトが進められます。それから7ヶ月後の11月、秋岡さんが置戸と曲げ桶の両方の「オケ」から名付けた「オケクラフト」が日本橋高島屋(東京都)で披露され、大きな反響を呼びます。



(オケクラフト)

当初は、本業の傍らで生産する裏作工芸を思い描いていたものの、たくさんの注文が寄せられるようになると、本業に転換する人や町が始めた研修制度で作り手になる人が現れ始め、本格的な生産が始まります。

このような背景の中、1988年(昭和63年)、ショップと作り手育成のための機械設備を兼ね備えた現在の森林工芸館がオープンします。以来、森林工芸館は、オケクラフトという地域ブランドの中心施設として、生産と販売の両面で多方面に情報発信を続けてきました。



(森林工芸館外観)



(森林工芸館内部)

■秋岡コレクションの移転

正式には「置戸町山村文化資源保存伝習施設」という一息では読み切れない名称の「どま工房」。森林工芸館に隣接するこの施設は、「日本の手仕事道具—秋岡コレクション」の展示・収蔵施設になっています。秋岡コレクションは、江戸時代後期から昭和中期までの手道具と、それらの道具と技から作り出された生活用具6,500点、映像資料や秋岡さんの出筆資料を合わ

せると18,000点にのぼる貴重な文化資産です。



(どま工房外観)



(どま工房内部)

秋岡さんは、亡くなる前年の1996年から資料の一部を置戸町に移転し始めます。「置戸は地震がなく、梅雨もシロアリもない。資料には安全な場所だから」という理由でしたが、これは秋岡さん一流のジョークも交えたもので、もっと高い理想を置戸に追い求めていたのです。ところが翌年4月に急逝され、ご遺族から残りの資料が一括して寄贈されます。

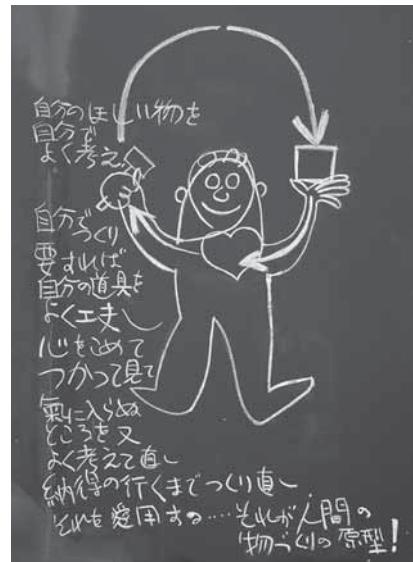
秋岡さんが道具等を収集した理由は、3つと言われています。

「日本の木工技術を保存するため、いいものを作り残す。いいモノづくりに合った素材を探す。いいものを作る技術を残す」、「これから的生活文化をデザインする素材として、道具はどんな使われ方をしたのか。作り方はどうなっているのか。何の素材を使い、どうしてその素材なのか」、そして3つ目が「手の復権を願って」です。

■秋岡芳夫展のメッセージ

30周年の記念事業は、前年の2012年8月にプレ記念事業として開催した「DOMA秋岡芳夫 北海道置戸展」を皮切りに始まりました。その前年の2011年11～12月に目黒区美術館で開催された「DOMA 秋岡芳夫展」の巡回展となった展示会では、戦後進駐軍にデザインした椅子（織田憲嗣氏所蔵）をはじめ、童画や版画、挿絵など作品、デザイナー集団「KAK」を中心として活躍した工業デザイナー時代のユニ鉛筆やカメラ、

露出計、科学雑誌の付録、岩手県大野村（現：洋野町）や宮城県津山町（現：登米市）、置戸などに力を注いだモノづくり・地域づくりデザイナーとして功績、手仕事道具と生活用具を収集保存し、後年置戸が寄贈を受けた「日本の手仕事道具—秋岡コレクション」など、秋岡さんのどれもが一流で多才な足跡を顧みることができるものでした。旭川や帯広にも縁があったことから、消費は美德とされた高度経済成長期に「消費者をやめて 愛用者になろう」などの秋岡メッセージに共感した方や、秋岡先生の知り合いの方など、道内各地から大勢の方が観覧に訪れていました。



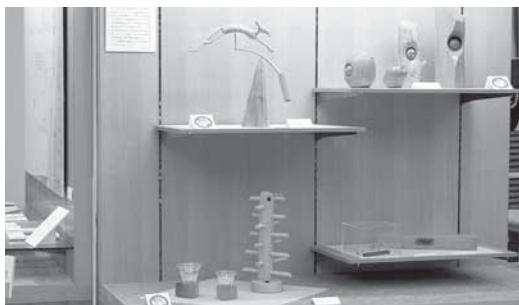
(秋岡展に掲示の秋岡メッセージ)



(置戸展に展示の秋岡コレクション)

翌2013年、30周年本番の記念事業は、これまで支えていただいた地域の人やお客様への感謝を込めた催しを展開しました。「みんなでいっしょに」を合言葉に、町内で生まれた赤ちゃんにお祝いの木製食器6点セットを贈る「すくすくギフト」、あつたらいいな！こんなオケクラフト」募集、異素材のモノづくりを目指す「作り手コラボ」等々。

中でも、浜 美枝さんの講演を聴いてオケクラフトに盛られた地域料理を楽しむ「いっしょに暮らしと文化を



(置戸展に展示した資料)

「楽しむサロン」は、オケクラフトが誕生する契機を再確認する機会となりました。盛り付ける器、取り分ける器のほとんどに地域材の器を使い、料理研究グループなどのみなさんが作った地域素材ふんだんの料理を味わった後、浜さんの「古民家を再生した自身の暮らし方や、それぞれの地方に残る豊かな暮らし方」の話に耳を傾けた200人以上の人们は、地域の暮らしや文化とモノづくりの関係性を改めて五感で感じていたようです。このように30年を記念した事業は、31年目からの新たな取り組みもスタートすることとなりました。



(地域料理の味見サロン)

■大きく変化した素材環境

ここまで話を読まれると、誕生してからの30年間、オケクラフトが順風満帆に発展してきたかのように思われるがちですが、どこでもそうであるように山あり谷がありが連続の30年間でした。歴史の浅い北海道内には伝統工芸と呼ばれるものが少なく、技術的な蓄積も多くありません。造材・製材技術の蓄積はあったものの、工芸的な技術蓄積がほとんどなかった置戸も例外ではなく、初めて見る木工口クロ技術に感動し、見様見真似で技術を習得、試行錯誤を繰り返しながらの30年というのが偽りのない姿といえます。

特にここ7、8年ほど前からは、素材という根本的な課題に直面し始めています。木材業界全体から見て、クラフト産業が使う材積はごくごく少ない量のため、建築材に適さない部分を製材工場から譲り受けることがいちばん効率的で、安定的な供給方法となるのですが、オケクラフト誕生の原点ともいえるエゾマツ天然材の減少に

加えて、大径木の針葉樹天然林材を取り扱う製材会社も少なくなり、材料入手が難しい時代を迎えています。しかも近年は針葉樹だけでなく、広葉樹も同じような傾向になりつつあって、以前のように良質材を容易に入手できた時代が過ぎ去ろうとしています。

木材は、短時間で人為的に作ることができるものではありません。適した気候風土と長い年月が必要ですから、手に入りづらい材を追い求めるだけでなく、手に入れやすい樹種を活用していくことが工芸的な考え方といえます。このためシラカバ材を活用した製品など、これからも時代環境と対話したモノづくりが求められていくことだと思いますが、できる限り地域材、道産材を使うということにこだわりを持った姿勢が続けられるようにと願っています。

■暮らし中の生活雑器

誕生当初よりモノづくりを続けているベテランから、今年4月に研修を終えて独立した作り手まで、オケクラフトの作り手は現在20人を数えます。雑煮椀づくりに集まった町民の中から作り手が生まれ、町の研修制度に応募した若者が作り手となり、オケクラフトの屋台骨を支えてきました。30年経過した現在、町外から移住して作り手になった人が13名と、全体の3分の2近くとなっています。開始以来延べ50人ほどの人が受講した研修制度は、現在都合により一時休止していますが、できるだけ早期の再開を目指して研修内容の検討などを進めています。



(30周年記念行事に掲示した作り手のパネル)

素材の確保、技術の継承、作り手育成、使い手が求める機能や安全性の追求、使いやすいデザイン研究等々、オケクラフトに求められる課題は数多くあります。社会教育活動の一環から生まれたオケクラフトが、30年という時を経て置戸の地域ブランドに育ってきました。

秋岡さんに示唆された「地域の素材と技で豊かな生活文化の創造」という永遠のテーマに向かいながら、木が持つ優位性を生かした北海道からの生活雑器として、オケクラフトが今後もみなさん愛し続けられることが、40年、50年の歴史を歩むことのできる原動力となります。